

2022年11月10日

11/10/2022

アメリカ学会海外渡航奨励金

ASA-JAAS

山田優理

Masayoshi Yamada

To say the American Studies Association is a unique organization is an understatement. With its interdisciplinary nature, collective intellectual rigor, and progressive and radical politics, the ASA continues to carve out new space for merging theory and action into dialectical praxis. The annual meetings provide a collaborative venue for scholar-activists to critically explore, among others, the politics of culture and the culture of politics in the United States and beyond.

The 2022 Annual Meeting, held in New Orleans, LA, November 3-6, was no exception. Sessions such as “History on Fire: A 25th Anniversary of *Scenes of Subjection*,” “Performative Arts and Cultural Wars of Sound,” “The Black Arts Movement in the South,” and “Abolitionist Praxis in Prison Education” were intellectually invigorating and politically astute—my only wish was that writer and teacher Kalamu ya Salaam could have attended the Black Arts session as commentator. I also appreciate the ASA’s effort to underscore in its program the struggle and triumph of African Americans in New Orleans. I participated in two of the Program Committee Sponsored Sessions, “Expanding the Tradition: (Black) Music Education and Mentorship in New Orleans” at the New Orleans Jazz Museum and “Eve’s Bayou and the Black of Black Film” at the Prytania Theaters at Canal Place, as well as a tour called “The Backstreet Cultural Museum: A Powerhouse of Knowledge.” These events effectively featured the cultures of Black New Orleans as a site of knowledge (re)production that emanated from their distinctive history of resilience and struggle for social change.

The highlight of the 2022 Annual Meeting was, without a doubt, the Presidential Address delivered by Shana L. Redmond (Columbia University). Entitled “Dark Prelude,” the address epitomized the spirit of the American Studies Association. Interspersed with music, it was insightful, imaginative, and interdisciplinary; Dr. Redmond’s narrative was informative, emotive, and compelling; and her critique of the carceral state was vigorous, timely, and politically relevant. It was one of the most formidable addresses that I ever heard.

I consider myself fortunate that I was given an opportunity to present my research in these dynamic environments. The session I helped organize under the title “Musicality of Place, Locality of Sound: Musicking as Placemaking in the Changing City” attracted a diversity of participants and ended with a robust discussion. Three panelists—Joey Thompson (Mississippi State University), Amanda Marie Martinez (Emory University), and I (UCLA)—benefited enormously from Christina Zanfagna (Santa Clara University)’s exceptionally incisive comment.

I am certain that the knowledge and understanding I gained at the 2022 Annual Meeting will not only advance my research, but also inform the ways in which we navigate the social and political uncertainties of the post-pandemic world. On the one hand, the heightened presence of police here in New York City, where I am conducting archival research at the time of writing this report, will not mitigate the risks of violence in the public transit system as they primarily target fare evasion. On the other, nearly 48,000 academic workers at all of University of California’s ten campuses, myself included, are poised to go on strike on Monday November 14th. It will be the nation’s largest strike of academic workers. We are now living through another moment of conjuncture, another moment of collective struggle. It is both a crisis and an opportunity for us to bring theory and action into transformative praxis. And that, to me, is the tradition of the American Studies Association.

2022年11月17日から20日にかけて、アメリカ合衆国シカゴで開催された **Social Science History Association** の年次大会にて口頭発表を行った。今回は私にとって初めての海外での学会発表の機会であり、大変貴重な経験となった。以下に学会参加の報告及び自身の口頭発表の報告をまとめたい。

まず初めに、学会に参加し、他の研究者の方々の発表を聞いたときの所感をまとめる。この学会の特徴は歴史学、経済学、社会学、政治学、人類学など社会科学の研究者を学問領域横断的に繋ぐ組織であることである。発表の質疑応答では、政治学者や社会学者といった自身の立場を明確にした上で、自由に意見交換をする場であったことが強く印象に残っている。例えば、初日に参加した、スウェーデンの国家形成と経済発展の過程における宗教と教会の役割を論じた発表は、経済に関する量的データを主に扱った研究であった。経済学についての知識がほとんどない私の質問に対しても温かく受け止めてくださり、一緒にその発表の場を作り上げていく過程を肌で感じた。

次に、自身が行った口頭発表に関する報告をしたい。今回の発表では“**Perspective of an Analytical Framework for the Comparison of Political Process of Three Veterans' Policies**”と題して、三つの退役軍人政策を比較するための分析枠組みの検討について発表した。4日間ある学会の中で、最終日の最終セッションでの発表であったため、日を重ねる毎に緊張が募った。プレゼンテーションは予め原稿を作り、発表練習など準備をしていたため、当日予想していたよりも緊張なく本番に臨むことができた。しかし、質疑応答で悔しさが残った。自分の中で即座に回答がまとまらなかった質問は次の二つであった。それは、「過去の時代を対象にした研究が今の問題解決にも役立つかどうか。どのように役立つのか」と「アメリカの退役軍人政策を研究する際に、日本と比較するとどのような見解が得られるのか」という質問であった。最初の質問は、学内での博士論文構想発表会で発表した内容であったのにも関わらず、落ち着いて答えることができなかった。自身の研究が現在の問題解決にどう役立つかということは、絶えず日々の研究生活の中で考え続けなければならないことであるということに改めて感じ、その質問に自信を持って答えられなかったことに深く悔いが残った。またこの学会の期間全体を通して常に感じたのは、自分は日本から来た研究者であるということである。二つ目の「アメリカの退役軍人政策を研究する際に、日本と比較するとどのような見解が得られるのか」という問いは、日本人がアメリカ研究をするからこそ問いかけられる質問であった。他の発表でも、自身の研究対象について「自分の出身国では、こういった背景がある」と事例を紹介する内容を含む意見の交換も多かった。日本に身をおいて、アメリカの政策を研究対象とする意味を考える機会となった。

今回の学会発表で、自由にアイデアを交換し合うことで内容を深め合っていく過程を肌で感じた。また悔しさが残る口頭発表では、自身の研究を、自分自身の出身国や現代との関係という、より広い枠組みで常に考えていく必要があることを感じた。このような経験に援助くださったことに対して改めて感謝すると共に、将来日本のアメリカ研究に研究成果を還元できるよう、引き続き自身の研究に取り組みたい。

報告書

大賀瑛里子（ハワイ大学マノア校・院）

2023年3月30日からロサンゼルスにて行われた The Organization of American Historians (OAH) の年次大会に参加した。私は、“Transpacific Crossroads: Identity, Geopolitics, and the Mobility Turn” のパネルにて、“Hula Tourism and Local Identity in Fukushima, Japan” というタイトルで、福島のフラ・ツーリズムと地域アイデンティティの形成について発表した。パネルは、20世紀の米-アジア間のヒトや知の移動がもたらした政治・文化・イデオロギーの変容をテーマとし、他のパネリストの先生方と1年以上前から発表の計画を進めてきた。Annelise Heinz 教授（University of Oregon）をチェア及びディスカッサントとし、Constance Chen 教授（Loyola Marymount University）、JoAnn LoSavio 教授（Washington State University, Vancouver）、Lisa Tran 教授（California State University Fullerton）がパネリストとして参加された。

私が今回発表した内容は自身の完成間近の博士論文の一部であるが、ディスカッサントの Heinz 教授をはじめ、パネルを聴きに来てくださった研究者の方々から、博士論文の発展に繋がる貴重なコメントをいただいた。特に、発表の中で触れた20世紀後半の日本でのフラの受容のされ方に見られるジェンダー観について、当時の日本人の階級意識との関連を考察するとよいというコメントは、20世紀後半の日本とハワイの関係を理解する上で重要な視点だと感じた。

他のパネリストの先生方のご発表からも、20世紀の米-アジア間の文化史における多様な視点を学んだ。Chen 教授は20世紀初頭の白人アメリカ人女性の日本と中国への旅行について、LoSavio 教授は冷戦期のタイ人のアメリカへの移動と近代性について、Tran 教授はベトナムからアメリカに渡った難民のエスニック・アイデンティティについて発表された。それぞれのご発表から、20世紀米-アジア間のヒト・モノ・資本・文化の移動が、アメリカやアジアに住む人々のアイデンティティや人種観・ジェンダー観の形成に大きな影響を与えてきたことを学んだ。アメリカまたはハワイと日本間の文化関係を専門とする者として、環太平洋文化史の分野でご活躍する先生方とのディスカッションは大変貴重な経験であり、今回学んだ視点を自身の博士論文に活かしていきたいと強く感じた。

また、学会中には毎日他のパネル発表にも出席し、さまざまな国・地域から集まったアメリカ史を専門とする研究者から多くのことを学んだ。トランスナショナル・ヒストリーをテーマにした“Transnational History and its Discontents” や“Language and Historiography” などのパネルでは、トランスナショナルな歴史を書く上での英語以外の言語で書かれた資料を扱うことの重要性を学んだ。また、黒人研究は古くからディアスポラという国を越えた概念に注目してきたにもかかわらずトランスナショナル・ヒストリーが語られる上で軽視されることが多かったという指摘は、近年のトランスナショナル・ヒストリーの興隆を理解する上で重要なものであると感じた。この他にも、“Asian American History and Its Publics” や“Histories of Asian American Resistance” というパネルやハワイの歴史をテーマにしたパネルなどに出席し、日系アメリカ人仏教徒と黒人運動の関係や、ハワイのポルトガル系移民の戦争参加など、太平洋やアジア系アメリカを形作ってきた歴史の複雑性を学んだ。今回の学会での発表とパネルの出席を通して学んだ視点を、今後の自身の米-アジア文化関係史の研究に活かしていきたい。そして、このような貴重な機会をご支援いただいたアメリカ学会に、心より感謝を申し上げたい。